

大磯に残る珍しい夏祭り

同窓会会員：植地 勢作

投稿日：2016年6月21日

大磯には「国府祭」（こうのまち）という祭りがある。毎年五月五日に行われる。この祭りのメインは神社の上座争いを摸した「座問答」という風変わりな神事である。歴史は古く、紀元六四五年の大化の改新までさかのぼる。

大化の改新によって中央集権体制が確立し、それぞれの国の中心には国府がおかれ、国司が行政を行う体制が敷かれた。当時、国司が着任して行く最初の仕事は、国の中の一番大きな神社から参拝して巡るということであった。この参拝の順序が現在も「一之宮、二之宮、三之宮・・・」として残っている。

相模国はかつて大磯を境に東は相武（さがむ）、西は磯長（しなが）という二つの国に分かれていた。この二国が大化の改新の際に合併して相模国となった。

相模国には寒川神社、磯長国には川勾（かわわ）神社が両国のナンバーワンとして君臨していた。合併後、この二社は、「我こそは一之宮なり」と、互いに譲らない。比々田（ひびた）神社、前鳥（さきとり）神社、平塚八幡宮の三社がこの争いを何とか解決しようと仲裁に入った。その解決策はなんと「問題の先送り」であった。

この様子を儀式化したのが「座問答」という神事である。

大磯の国府新宿に、土地の人が「かみそりやま」と呼ぶ、紙揃山という小高い丘がある。ここに寒川、川勾、比々田、前鳥、平塚八幡の五つの神社がそれぞれ独自のルートを通して集まってくる。

祭りのクライマックスは、寒川神社と川勾神社が交互に虎の皮を上位に進め「我こそは一之宮である」と主張し、それを三回繰り返す。エンドレスになりかねないところを、「三つ」は「満つ」に通じる、もう十分でしょう、論争もそこまでと、比々田神社の宮司（女性）が割って入り「いずれ明年まで」と述べて問題を先送りしてしまう。



各神社がそれぞれ独自のルートを通して集まる



広場で神輿を煉る。神輿がひっくり返ることもある。



いよいよ座問答の神事の始まり



二頭の虎の皮による上位争い |

「いずれ明年」が千年以上も続いている。勝ち負けを決めないところが神様らしい円満解決法なのだろう。

(植地 勢作)